

3. 第28回起業教育研究会報告

①特別講演

「『学生応援』 起業家精神を育む学生スタッフの在り方」



学校法人神山学園
神山まるごと高等専門学校
学生相談／国語担当 春田 麻里

神山まるごと高専について、たくさんの方に知っていただけているかなと思います。テレビとか、色々なところで、メディアの中でも放送されることが多いのですが。私たちがほんと更地の状態からどんな学校をつくらうとして、学生たちがどんなふうに活動しているかというようなことを2期生を迎えて生徒数が80人になった今、状況をお伝えしたいと思います。私は徳島県の高校教員として、26年間勤務していました。そして、先ほど色々なところで少々お声を聞いてたら、三菱みらい育成財団に申し込みされて、探究の授業を学校で頑張っておられる先生方、沢山いらっしゃるのだと。私もその三菱みらい育成財団の補助金を受けたり、それから、探究の授業を色々変えていこうというふうなことで、学校の中で色々な活動をやってきました。ただ、その中で、本当に探究をやりながら、一方では、私が行ってた県立の高校では、国公立大学に何人行けるかというようなことというのが、すごく大事な目標にされていたので、本当に毎日家に帰ったら、膝を付くぐらいで、トイレに行く暇もないぐらいの状態です。一方では、私は国語担当なので、小論文の添削に外で学生が並んでるというような状況で。もう21時ぐらいまでずっと添削を毎日し続けるという、そんなこともやりながら、学校生活をやってました。なぜそこまでやるかというと、そこまでやらないと、探究をさせてもらえないという状況もあったのです。しっかり受験指導はやってますよ。うちのクラスから、ほかのクラスの3倍以上やっていますよ。だから、いいでしょうというふうなところもなければ、探究ができないような、そんな環境もありました。その探究の授業

が、小論文の添削をしてる中で学生といつも見てたのが、「イン神山」という、神山町のホームページだったのです。なぜ、それを見るかということ、地域系とか、社会系に進学したい生徒がたくさんいるんですけど、小論文の参考とか、志望理由の参考に、一番、イン神山のホームページが良かったんです。地方創生の最先端がそこにあるなど、いつも感じていました。それで、イン神山のホームページをいつも見てたんです。神山の町の方々が活き活きと生活して、新しいことがどんどん起こってる町という感じがありました。その中で、神山まるごと高専を設立します。今、この何もない田んぼの土地に学校をつくりますというふうな言葉があって。それを一緒に、小論文の添削を行っていた生徒と見てたら、生徒が「先生、これ好きなやつちゃうん？」って。「こんなん、先生、したいやつちゃうん？」って言ったのです。私はその時に「え？」と。自分が公立の高校の教員を辞めるということは考えたことなかったんです。家に帰って「辞めてやる」とかって、暴れるぐらいの。まあ憂さ晴らしとして言うことはあっても、本当に辞めますということは真剣に考えられなかったんです。その時に生徒が柔軟な…。「別に先生を辞めても、ここでも先生はできるんじゃない？また先生がやりたいことできるんじゃない？」という言葉聞いて「そうだな」と。その時に、本当に考えました。ちょうどまだコロナの最後の時で、その頃の管理職が、学校の「コロナを出さない」という大目標を掲げてた時に、駄目だと。これはこのままでは、私は退職までこのままだという、もう学校はちょっと難しいという気持ちもありました。それで、タイミングがいろいろ重なって、もう私は、せっかくこの生きてる人生の中で、自分なりのチャレンジというのをしてみたいと思って、神山まるごと高専に転職しようと考えました。一番初めは2022年で、小さなオフィスとか、サテライトオフィスの中の一角を借りてやっていました。実際、そこにいるのは4人だったのですが、そこから参加しました。ただ、事務局の中にいるのは4人ですが、実際にはプロボノといって、東京でボランティアとして、それぞれの広報だったり、お集めだったり、先生探しだったりというふうな、それぞれの専門分野の知識を生かして活動しているスタッフが、もう東京には100人以上いたのです。だから、実際には、動いてる人は100人以上の人が、もう既に動いているというふうな大きな組織になっていました。学生集め、サマースクールなど。今年もサマースクールがあるのですが、広報をしたり、説明会をしたり、キャンパスツアーをしたりというふうなことをしながら、同時に学校設立の準備もして、2023年に開校。1期生のクラスマネージャー。この言葉一つも、全部みんなで考えるというふうな感じで、担任なのかな？担任っておかしいかな？そんな話

もしながら、クラスマネージャーというふうな話をして。今もまだクラスマネージャーって、何をマネジメントするの？というのを、毎週クラスマネージャーの会議をしながらやっている途中ではあるのですが、クラスマネージャーとして今、1期生、2年生の学生に主に関わっています。場所は、徳島県の所謂、中山間地域というところなんです。トンネルが一つ通って、そのことによって、市内から40分ぐらいで来れるようになったのですが。私のこの前亡くなった祖父に「私は神山で働くよ」って言ったら、「ああ、ほんなら、神山に住むんじゃな」って言われたんです。「いやいや、通うよ。ちょっと遠いけど通う」って言ったら、「神山には通えんだろう」って。もう祖父の代の人達にとったら、本当に山登り。1泊は絶対必要な山というぐらいのところだったんです。だから、中山間地域という感覚を町の人が持ちだしたのは、割とそのトンネルができてからのこと。それまでは、ほんとに山を学校に行くために、高校生を持つご家庭が市内に一家転住してくるような、そんなふうな、結構通うのが大変な場所でした。今は本当にトンネルが通って市内から40分。空港からだ1時間ぐらい。東京まで2時間だという、簡単にいうとそんな場所です。ですから、理事とか校長とかが、割と行ったり来たり、東京と行き来しているんです。徳島から大阪までが2時間ぐらいですけど、バスで。それとほぼ同じぐらい。飛行機を使えば、東京までも2時間で行ける。ただ、本当に町の人の意識としては、すごく市内と隔たったところで、自分たちで何とかこの町をどうにかしなければいけないという気持ちは強い町だと思います。人口が約5,000人で、先ほど、この学校に学生さんは4,800人ぐらいの学生数とおっしゃっていましたが、大体同じような規模です。学校のかたちとしましては、高専という、所謂、国立高専というのが全国3県除いて、全ての県には国立高専があるんです。それと同じような形態を取ってまして、5年間で工業専門学校という高専です。受験のない5年間を過ごして、専門知識を身に付けていくというふうなかたちを取っています。学科は、デザイン・エンジニアリング学科という名前で、1学年40人。5年生までそろそろ、200人になる学校です。今は80人ぐらいのところなんです。特に特徴的なのが、全寮制を取っています。「まるごとってどういう意味なんですか」というふうなことをいろいろ聞かれることがあるのですが。まるごとの一つの意味は、生活の中からも学んでいくというふうなこともあります。ですから、徳島県内の子。それから、神山町内の子もいるのですが、その子もみんな、寮に入っています。15歳からの寮生活。受験のない5年間の中で、まるごといろんなことを学んでいくというふうなことを考えています。

(学校案内上映)

大画面で見たら、生徒達がすごくかわいいですね。すごく大人びてる部分もあるんですけど、やっぱり15歳、16歳なので、子どもの部分もあったり。その中で、寮生活でぶつかりながら生活していく。その中で、「学生応援」という言葉が学校の中で生まれてきました。

最後の画面に出ました「モノをつくる力で、コトを起こす」。これは私たちの学校の、合言葉です。育てたい人物像として、これはもう学生募集の段階からずっと言ってることで、入試にも反映されてるものです。モノをつくる力。つまりは、テクノロジーとデザインです。テクノロジーは、また後でご紹介しようと思うのですが、実際に物理的なものをつくることだけではなくて、プログラミングのような、全てのものがインターネットにつながっていくという社会におけるものづくりというのを念頭に置いています。そして、それを良くしていく。人に届けるためのデザインをして、起業家精神という、スティーブ・ジョブズが持っていたテクノロジー、デザインの力。それに、お友達の人が持ってた力。お友達が特に強かったのは、テクノロジーですね。スティーブ・ジョブズは、デザインと起業家精神がすごく強かった。あそこがチームでAppleをつくっていたと思うのですが、1人の人の中にこれをまるごと学べるようにしようと。それが基礎学力として身に付くようにしようというふうなことを考えています。これをもうベースだよというところに、きちんとこれが備わるということを目標として、育てたい人物像にしています。テクノロジー系の授業では、全てのものがインターネットに接続される。もうそれが当たり前前の時代が来る。インターネットというのが、もう本当にインフラ。水道から水が出てくるのと同じで、インターネットに繋がっているということが全ての基礎になるというふうな世界が、もう本当にそこに来るということを考えて、プログラミングとか、電子工学、そのようなことを基礎的な教養としてやっています。続いて、デザインです。デザインは、自分のつくりたいもの、頭にあるものをかたちにする力という意味で、デザインとしています。それともう一つは、今あるものをより良く人に見せるとか、より良く人に届ける力もデザインと考えています。学生がすごく好きなんです。デザインが好きなのが沢山いて、それで色々なものを見たら「これは駄目だ。赤字に赤字なんか駄目だ。これはイケてない」とか。それとか、いろんな看板を見て「駄目だ。UIができてない。あれは良くない」とか、何かみんなが言ってるんですね。学生にとってはその目線。自分が分からないんだではなくて、分かるようにデザインすることのほうが大事なんだというふうな目線が変わってきてる。つくる側に今、目線が移ってきてるなど。このデザイン授業を通して、そう感じています。リベラルアーツ系

の専門授業。先ほどのテクノロジー、デザインの授業が半分ぐらいで、一般教養、リベラルアーツの授業が半分ぐらいの割合です。ですから、社会とか、文章表現とか、そういうふうな基礎的な所謂、5教科みたいな授業というのも沢山やっています。英語もやっています。ただ、それが、ほんとに文法を習うとか、何かを覚えるのではなくて、これをどう使うか。みんなが習ったデザインとどう組み合わせるかとかいうふうなところを重視した、アウトプットを重視した授業になっています。

そして、起業家精神系の授業です。これは授業として位置付けられているものもあるのですが、放課後とか生活の中にも沢山埋め込まれています。授業の中では、1年生の時には、ネイバーフッド概論とあって、隣人と生きるというようなことをテーマに、神山町内の小さな企業をされている方とか、神山町内で社会起業的なことを行っている方。それから、全国から、世界から色々なゲストをお招きして、話を聞いたり、一緒にワークショップをしたりしています。今は2年生になったので、2年生はアントレプレナーシップ概論というので、本当に業を興そうよ、コトを興そうよというふうなことを具体的に授業の中で学んでいます。また、先ほどの映像の中には、先生っぽく学生と接していたけど、実は、先生じゃないという人が5人ぐらい映ってたんです。学校の中には、広報担当とか、デザイン担当とか。それから、学生の寮と一緒に住んで、学生の生活を見守るスタッフ。かつ、教育的な視点を持った人みたいな方もいて、色々な立場で学生に関わっていて、先生だから教えてくれるとかではなくて、色々な大人から、自分がマッチする人を見つけて、その人に習うというふうなことを学生がすごくやっています。ですから、NHKの取材に来てくれた人に、密着で1カ月ぐらい来ていたカメラマンの人がいたのですが、その人にくっついて「カメラを触らせて、映させて」とか。「小さいカメラ貸して」とか言って、もう友達みたいになって。でも、習える人なら誰からでも習うというふうなところで、学生はまさに隣人と生きながら、自分がどうやって力を付けていくかということを学んでいます。

卒業後は、起業という業を興すというのが特別な人とか、ドロップアウトした人とかいうのではなくて、ごく当たり前の選択肢になるようにしたいなと思っています。就職、編入が3割と3割で、起業が4割ぐらいだったらいなというふうに思っています。この前から2年生が、「起業する。もう会社登記する。」って、すごく盛り上がってたのですが、色々な人に相談して、本当にやろうとしたら「ごめんなさい。やっぱりやめます。夏休み、しっかりもう少しこことこを勉強します。それからやります」というふうに、や

ろうとする中で学ぶべきことが沢山出てくるというふうなサイクルが回っていったという感じ。後ほどまたご説明しようと思うのですが、起業だったり、コトを興すことだったり、モノをつくることだったりということを実際にやるという中で、何を勉強しないといけないかということ、学生が自分で選び取っていく。そういうふうなかたちが起こってるのが、楽しいなって思っています。本当に起業する人がどれくらい出そうなのか。ほんとに応援していきたいなって、楽しい状況です。

学生を応援するというのが、一つのチームの名前になっていて、それが学校の中でもよく使われるキーワードなのですが。学生を応援するってどういうことなのだろうということを、私たちが1年間ずっと試行錯誤してきた中からお伝えしようと思います。学生を応援するということは、アンテナを張りつつ待つということだというのが一つ、私たちが気づいたことです。本当に初め、開学する前はずっと余白を大切にしよう。学生に手をいきなり差し伸べるのはやめよう。先回は絶対やめようというふうな合言葉をみんな持ってたのですが。スタッフの目線を合わせてたのですが。実際に学生が来たら、すごくやっぱり、待てないのですよね。

これが寮の写真なのですが。こんなイケてる写真は、ほんとに奇跡の1枚なんです。これ、ほんとに、こんなに綺麗なことって全くなくて。寮は本当に一時、何かもう荒れ放題のようになってしまったのです。特に男子のほう。靴下だらけ。え？何でこんなに片一方の靴下があるのだろうっていうぐらい、靴下だらけだったりとか。ほこりもいっぱいあったり、ごみなのがお菓子なのかわからない。食べたあとのものが置いてあるとか。ゲームをもうずっとやってる子。寝たままゲームをやって、そのまま学校に行く。そんなようなこともあったりして、これってどうしたらいいのって。もう普通に考えると、すぐに掃除当番を決めて、誰が何日にやりますとか。それから、委員会をつくるとか。それから、消灯時間を確実に守るようにするとか、いろんなことを考えたのですが、もう随分待ったのです。ずっと待ち続けて、本当にもうこれは駄目だと、学生の中から声が出てきたのです。これは健康に良くないよ。これは自分たちの学びにならないよ。こんな環境で学ぶというのは良くないのだということを、学生の中から言い始めた。それでできたのが、クリーニングパーティというものです。

フライデークリーニングパーティという名前だったのですが、今、マンデークリーニングパーティもできて。なぜか、フライデークリーニングパーティをやったのに、土日を経たら月曜日に元に戻ってる。これでは駄目だということで、また改良されて、フライデーとマンデークリーニングパーティを

やってる。クリーニングパーティをやってたんですけど、それもまた変わってくるんです。フライデー、僕はやりたくないよ。自分の部屋はやってるから持ち場はやってるから、フライデーにやらなくてもいいよ。その頃、すごく変なことが流行って、超朝活というのが流行り始めたのです。夜7時に寝て、3時に起きるって、全く意味が分からない。どういうこと？って。朝の3時から起きて…。始めは、回線のいい時にゲームを思いっきりやりたいみたいな趣旨だったみたいなのですね。そのうち、それもやっぱり面白かったのですが、誰も止めずにゲームをやらせてると、ゲームをやめ始めるのです。もうゲームをやらない。3時に起きてゲームをするなんか、ばからしい。時間ももったいない。この時間に勉強をしたいというふうに、勉強が変わっていくという。それもなかなか観察して面白かったのですが。その超朝活グループが、クリーニングパーティの時間には、もう僕たちは寝てますから。結構な一大勢力だったのです。10人ぐらいいたのですが「僕たちは寝てますので、その時間は参加しません。でも、自分たちのところはやってるからいいでしょう」という、クリーニングパーティ自体が崩壊しそうになってきたのです。それも学生同士で、クリーニングパーティチームを設けますと。その人たちがどうやったらじゃあ、いつだったらクリーニングパーティがうまく行くか。どんなふうにしたらいいのか。チェックリストは何なのかとかいうのを自分たちで考え始めて、フライデークリーニングパーティ委員会に似たようなもののチームができて、今はそのチームが回しています。離寮というのがありますが、寮の部屋を全部空っぽにして、一旦出るんですね。前期、後期で。それも、前期はほんとに大変で。スタッフが回って1ミリも片付いてない。「これを明日出るんだよ。どうやって荷物、これ、片付けるの？」というような状態だったりしたのですが。後期からは、このクリーニングパーティチームが「私たちでやります。私たちは自治を目指しています。これぐらいのことは自分たちでできなければ、できないことがいっぱいあって、やりたいことをやるということではできないと思う。だから、自分たちでやります」ということで、クリーニングパーティチームが離寮のこともこの前やって、無事にやり終えています。でも、待つ期間は本当に長かった。どうするのですかって、やっぱりいろんな人にも言われました。健康を守ることが大事ではない？とか、決まりというもの一つはいるよとか、教えることだって大切だよというふうなことも、沢山言われたのですが、一旦待とうと。寮長とか色々な人と話し合いながら、待とうと。だから、放ってるわけではなくて、アンテナを立てて待つという。それがすごく、なかなかできづらいことなのですが、必要な時間なんだなということを感じました。

それと同じようなことが色々起こってきまして、例えば、Wednesday Nightというイベントがあるんです。これは大南さんという、神山町のこういう学校をつくろうとか、町を興そうということをされてきた方です。この人のことを言う時、みんなが、「我らの」って絶対付けるのです。「我らの大南さん」って。大南さんって、すごく学生みんなが好きなのですが、こんなふうに水曜日の放課後に、Wednesday Nightという名前で起業家が来てくれて色々な話をしてくれるのです。地域の方もいらっしゃれば、星野グループの星野さんだったりとか。それから、ENAの南場さんだったりとか。もう大人はすごくガクガクしながら、子どもはすごく何か…。全然どれぐらいすごい人か分からないので、「名刺ください」とかって、気軽に話しかけたりしてましたけど。このWednesday Nightも自分たちで企画したいというふうになってきました。それはなぜかという、参加者が減ってきて、もったいなくないかって、学生同士で言い始めたのです。初めはスタッフが出席を取ってたのですが、出席を取って来ない人は来なさいって言うのは違うよねというふうに、学生とスタッフと話して。じゃあ、どうしよう。来たい仕組みをつくろうというので、学生の中で、Wednesday Nightチームというのができました。じゃあ、出席した人にすごくいい特典があるようなことにしよう。起業家の方々と直接話せるようにしようとか、焚き火に参加できるようにしようとか。それから、出席を取るのではなくて、このカードをここに入れたら出席になるよというのにして、それが次の起業家を囲む時間につながるような、そんなものにしようとか。それから、動画を残して、みんなでものを残すようにしようとか。そういうふうに、Wednesday Nightの運営委員というのがより良いWednesday Nightを考え始めた。これも、本当だったら出席を取りたいとか「出なさいよ」って言いたかった。でも、これは授業にしないというのが、私たちの開校前からの約束だったので出席を取らないし強制もしない。すごく私たちからすれば、もったいなくて思うような時間もあったのですが。でも、それもアンテナを立ててずっと待つことで、今年すごく変わってきました。

先ほどのカメラを触ってみたいという学生たちですが、これはWednesday Nightとかで動画を残してたのですが、初めはスタッフがやってたのです。それから、映像の会社さんが入ってくれる時もあったのですが、それを見ていた学生が、私もやってみたいなって。すごく高価なカメラ、そんな簡単に触らせない。でも、いいよって。じゃあ、ここをやってみようかというふうに、少しずつ学生に学生の得意な配信のところとか編集のところから入りながら、次は、映像の制作をしてみよう。自分たちで撮影にどこか旅行に行っ

てみようみたいなことが始まっていて、このWednesday Nightでカメラを使って何かをやりたいって言っていた学生の中から、映像を発信する広報が好きって自分で思い始めて。自分は撮ったものを人に届ける広報的なことをやりますというふうになってきた。別の学生は、デザイン的なことが好き。どれだけ美しいものを残すかというところが好き。私はそういうのが好きだというふうなことを明確にし始めた。また別の学生は、映像づくりが好き。映像自体をつくりたい。先ほどの動画の中でも、学生が撮った素材がたくさん使われてるのです。学生しか寮の中に入れないので、他の人は入らないようにしてるのです。安全性とかもあって。だから、カメラマンとかは入ってなくて、学生が自分たちで撮っている素材がたくさんあるんですけど、それをあの子たちが撮ってる。撮りたい、映像づくりをしてみたい。さらに別の学生は、写真に興味があって、写真を撮ります。写真の技術を習ってるような感じで、一つ何かをアンテナを立てて待ってみる。まあやってみようかということで、学生のやりたいことがどんどん広がっていく。この中では、映像を自分でつくって請け負って、お金をもらって作り始めてる学生もいます。そんなふうに、少しずつ、勝手に自分たちで歩み始めるというか、そんなところがあるのだなということを持ってみて初めて、やっぱり得られるものがあるなってことをすごく感じました。

Wednesday Nightで焚き火を囲みたい。毎回スタッフに許可を取ってたんですけど、もう自分たちでやりますと。どうしたらいいのですか。消防署に連絡する。だから、薪を集める。薪になる木を切ってきて、それを自分で薪状にして、乾かして。今日はこの薪を使いますというふうなことを言って、焚き火台を出してセットして。起業家の方をここにお招きして、一緒に話をする。普段の話よりも深い話ができるというのを、学生は焚き火を何回か囲むうちにすごく感じてました。焚き火があることで、すごく何か違うらしいです。ご飯を食べながらというのとか、図書館でとか、いろんなパターンがあるんですけど、焚き火がやっぱり一番いいというので、天気の手許限り、自分たちで焚き火の準備をして、「今日はセットできてます。起業家さん、ここに来てもらいたいです」というふうなことを言うようになってきた。こんなふうな、本当に些細な日常の中から常にアンテナを立てながら。でも、待つ。危ないよ、薪を切るのは危ないよとかいうのも、ちゃんと習ってきてるんです。薪をつくってる人に。じゃあ、あの人を繋ぐよというふうに紹介するということかたちで、アンテナは立ててるのですけど。でも、手出しはしないとか、先回りしないということをずっとやってきました。それが一つの応援だなというふうに感じています。

「学生を応援する」のもう一つが、マイプロジェクトみたいなことなので。これは授業の中でどれだけ学生を応援する場面があるかということです。例えば、ネイバーフッド概論という授業の中では、マイプロジェクトをやっているのです。後期がほぼ、後期の課題はマイプロジェクトだったので、自分が探究したいテーマを決めて取り組む。これは探究の授業とかでもたくさん取組まれている学校があると思います。問いを立てて、仮説、検証、学びというふうなのを繰り返していくというふうなプロジェクトなのですが。学生がやりたいことというのをできるように応援していく。身近なところから問いを立てていく。問いが立つような生活の中で、これってどうしたらいいのだろうというような話を学生と一緒にやることで、自然に問いができていくような、そんな場面も学校の中でできるだけ意識的に、そんな問いを投げかけたりもしています。また、他の授業でも問いを立てるような授業がたくさんあって、英語も、国語も、自分だったらどうするのだろう。これを表現するにはどうするのだろうというふうな授業がたくさんあります。

このマイプロジェクトをやった子で、1つの例なのですが。ものづくりの文化をつくりたい。この子は、家庭の中にある家事っていっぱいあるのだけど、それを改良していったら、何かいろんな事業につながるのじゃないかなと思ってる。それを良くすることってできるのじゃないかなって。ずっと変わってないものって、いっぱいあるよねって思っています。良いものというのを日常の中に埋め込んでいけば、みんながそれをつくってみようって思えるのではないかな。実際に、アナログ色が強かった生活の中の、この子にとって一番身近なのは、寮の点呼なのですけど。それを変えてみよう。こういうことができるのだったんなら、みんながやりたいと思えるんじゃないかなということで、やったんです。寮の点呼はほんとに昔ながらの点呼をしています。なぜかという、やっぱり安全というのは、寮はそこだけはもう必ず守ると。健康、安全、衛生というのを守ろうというので。点呼は、別に1回アプリで、自分たちで今いますというのを届けるみたいなことをやったりもしてたのですが、顔を見ての点呼がやっぱり必要だというので、必ず回っているのです。そしたら、日曜日の朝まで回ってくるのですよね、点呼が。それはすごくしんどいと。寝たいと。顔認証で行けるのじゃないかというのが、この子の仮説でした。やってみたのです。そしたら、技術的にはこれ、行けるということが分かった。これは行けます、やれます。ちゃんと全員の顔を認証できてます。でも、どうなのだろう。これを実際に使うとなったら厳しいなということが分かったのです。それが次なのですが。この学生の

顔には、学生番号が出ている。でも、局長って出てると思うんですけど、これは事務局長なのですけど。スマホの顔も認証してしまっている。やっぱり駄目だなあって。これはいない人でも、写真で点呼できちゃうな。じゃあ、これは安全を担保できないというので。技術としては行ける。でも、これをじゃあ、生活の中に落とし込むには、まだもう一つ何かがいるというところで今、さらに改良しようとしています。授業の出席とかもこれで取ろうというふうなこともいろいろ考えたりしています。

まず、やってみるといところで。これって、さっきのことって、初めから出てたんです。「写真でも行けるのじゃない？」とか、「ほかの人でも行けるのじゃない？」とか、いろんなことというのを問いかけてたんですけど。でも、そうだな、多分駄目だな。だから、やめときますじゃなくて、まず、やってみる。やってみた中で、じゃあ、次は何をしたらいいのだろうということに生かしていくというふうなことを、授業を通してやる時間というのを持っています。授業の中に、こういうふうな探究のサイクルが入ってる授業がたくさんあるというのが、一つの応援のかたちになっています。

そして、もう一つ、学生へのスタンスなのですけど。学生がいろんなことをやりたいって言うことって、あると思うのです。皆さま方の学校でも、できるだけそれを応援しよう、妨げないようにしようと思うのですけど、でもそれは駄目だろうということがいっぱいあると思います。私も勤めてた学校では色々、これは駄目だ、あれは駄目だということがすごくたくさんあって、確かになって思うこともあれば、駄目だと言うのが妥当な場合もあれば、いや、やってみていいんじゃない？って思うこともあって。でも、その辺の見極めって、大人がするものだって思ってたんですけど。でも、ここではやっぱりアンテナを立てつつ待っていく。学生へのスタンスは、もうそれを貫いています。

ですから、一つの例として、去年の4月23日。1期生入ってきて、4月に2日に開校だったので、20日くらいしかたってないのです。その中で、「神山町の小中学生向けのプログラミング体験会をやろうと思う」って言ったのです。いいなって。「どうして？」って聞いたら、「自分たちが入学してすぐに受けた、ITブートキャンプというプログラミングの基礎をやる授業がすごく楽しかった。これって、もっと早く勉強できてたら、もっとみんな楽しいのって思ったから、小中学生にやってあげたい。だから、ゴールデンウィークにやろうと思います」と。ゴールデンウィークって、あと10日くらいしかないなって。でも、良いよねって。「どのくらいの人に来てほしい？」って聞いたら、5人とか10人とか、小規模でやるかなと思ったんです。そもそ

も、中学生自体が、中学校全体で50～60人しかいない。小学校だけは、小さな学校だと20人もいないとか、そんな感じなので。それは、まあ10人ぐらいが妥当なのかなって思ってた「30人を想定してます。そのぐらいの規模でやるほうが面白いから」。「まあそうかもね。そうか。じゃあ、もし集まらなかったら、神山町外にも宣伝しようか」って言うたら、「いや、町内の子に、まずやってあげたい。誰でも来ていいよというのは、もう少しあとでもいい。自分たちは町のためにやってるってことをしたい」という。「確かに。でも、あと10日でできるかな」という話をしていました。また、それに続いて、小さい子もいれば、大きい子もいる。床に座ってるような小さな子もいたりするのですけど。本当に小学生から中学生まで一緒に部屋でやったのです。これ、計画する時は、無理だろうって言ったのです。小学生はローマ字を知らないで、プログラミングというよりは、「あ」はどこ？「い」はどこ？って、そんな感じだったり。それから、「ま」だったら、M+Aだねみたいなのを、ローマ字表を見るところから始めないといけない。だから、これは1つの教室に分けるか、時間を分けるか、何かしたほうがいいのかないかなって初めは言ってたんですけど。いや、いろんな人にいてほしい。その中の交流もしたい。だから、やっぱり一緒にやるというので、いろんな準備をして、スクリーンを見れば、どこを押すかが全部分かるような仕掛けというのをつくって、それで小学1年生から中学3年生までが一緒に部屋でプログラミングをやるという講座を学生が入って1カ月で実際にやりました。当日は何をスタッフはしたかという、校舎を開けただけ。あとは学生が全部、お互いに声を掛け合ってスタッフを集めて、道具を用意して。子どもに教えてというのをやっていたので、そうかって。「これは危ないよ、できないよ、無理だよ」っていうふうに止めなくていいのだということを実際にここで学んだというか、教えてもらったような事件でした。

学生を大人として信じ、“やりたい”というのを全力で応援するというのが、スタッフのスタンスとして大切なのだなということ、本当にこの件ではっきり教えられたような気がします。実は、入学前から学生と合言葉のように言っていた言葉が、先ほどのモノをつくる力でコトを起こすと、もう一つ、ここは小さな社会、あなたは大人という言葉があるのです。それはもうずっと、サマースクールの時からずっと合言葉として、あなたは大人です、ここは社会です。だから、あなたは自分で何を、どうしようと思うのですかというようなことを、いつも学生に問いかけてきました。ただ、それを私たちが問いかける以上、受け止めるという力がなければ、問いかけたのに結局やらさないんだったら、問いかけても意味がない。だから、私たちの待つ、アンテ

ナを立てて待つ。学生を支援ではなくて、応援するというスタンスがすごく大事だなということを1年間かけて確認してきました。学校であるような指導というの、もちろんあります。やっぱり法に触れるようなことについては、指導というのはいくらでも得ます。ただ、私たちの学校では、支援というのはあんまりないのだろうなということが、去年1年間、スタッフ同士でミーティングしながら確認したことです。支援というのは、1人で立てない人、支えなければいけない人を助けるのが支援。でも、学生たちは1人で立てる人なんだと。支えなくてもいい。学生が求めてきたことに応える、応援の応です。応えて助ける。それがスタッフのスタンスだということを確認してきました。去年の年度の途中で、学生支援というチームが学生応援に変わったのです。名刺もそれで、学生応援に変えたのです。初めは、スタッフはすごく恥ずかしい。学生の応援チームです。恥ずかしい。そんな外で言うのはちょっと……。中だけで言うのだったらいいけど、外に言うのはどうだろうというふうに、すごく恥ずかしいとか、何か変だなんて、違和感もあったのですが。ずっと言ってるうちに、全然何ともなくなって。もうごく普通になってきて、学生を応援するというのがほんとに普通の言葉。学生同士でも、応援しようというふうな言葉が、合言葉ようになってきています。

そんな応援の中から、たくさんの学生の多様な活動ができてきました。大きな活動でいうと、寮の中で「わー、やったー」って飛んでた男の子がいたと思うのですが。あの子は、初めて資金を集めたというので、あれは飛んでたのですが。FRCという、国際ロボットコンテストに挑む学生たちが出てきました。これは高専ロボコンとか、いろんなロボコンがある中でも、世界規模の大会で、アジア地区の予選がハワイであるのです。渡航費だったり、ロボットをつくるお金だったり、そんなのも全部自分で資金集めをするということが、一つの課題である。お金を集めるだけではなくて、アウトリーチ活動、社会貢献するというのも一つの課題として審査される。その上で、ロボットの良さ、チームとしての良さみたいなものが審査されるという、複合的な審査のあるロボットの大会です。その中で、お金を集めないといけない。最低200万だったと思います。何人行けるか分からない。お金がたくさん集まらなかったら、本当に5人とかしか行けない。チームでロボットを押し持っていくだけで、それだけで4～5人かかるような、そんなロボットなのですけど。それしか行けないかもしれないというような中で、ここに沢山のスポンサーチームの名前をTシャツに貼ってるのですが、スポンサー集めから去年、始めてました。ものづくりが大変好きな子、本当にものづくりが好きで。只々、自分が好きなものをつくってみたい学生なんです。ほん

とに毎日、段ボールを固めて、ヘルメット状にして、それをダース・ベイダーみたいにして、もうピッカピカにして、本当に買って来たヘルメットみたいに仕上げるみたいな、そんなことをずっと小学生の時から趣味でやっている。本当にものづくりが好きな子なのですけど。その子がほんとに去年、何回も泣きながら。「そんなの無理だよ。僕たちはまだ15歳だよ」って言うのです。「15歳なのに、お金なんか集めたことないんだよ。大人の人にお金をくださいなんて言えないよ」って、すごく泣いてるのです。「僕はつくってみたかったんだけど。ロボットをつくってみたかったんだけど。何でこんなことをしないとイケないの？」って、すごく泣いてるのです。そしたら、その中で、「じゃあ、お金は俺が集める」と、この子が。すごくコミュニケーション力が高い子、さっき飛び跳ねてた子が、じゃあ、お金の集めと、メカ班と、プログラミング班と、広報班と、みんな仕事を分けようよ。俺は人と話すのは怖くないから、俺がお金を集める」って言っちゃったものの、集まらないというので、この学生も泣いてたのです。それで、初めてお金を出すよ。じゃあ、何十万円。あの時、初めから100万円だったのかな。すごく高額のお金を出すよって言ってきて、それで飛び跳ねて喜んでたというようなことで。これも、「無理だよ。だって、ほかの学校は5年生までいるのだよ。1年生しかない学校で、そんなの出るのは無理だよ」とか。「こんな田舎にいて、そんな大企業に…。いくら沢山のスポンサーさんとかとお付き合いがあるとはいえ、学生がいきなり行って、話を聞いてもらえるだけでもありがたいことなんだよ」。そんなことも言いつつだったのですが、止めるということはしなかった。「無理だよ」とは言わずに、「じゃあ、やってみよう」というふうなので応援してきて、春に、4月にハワイにあのメンバー全員で行って、ルーキーアワードという、初出場のチームで優秀なチームに与えられるという賞をもらって帰ってきました。

学生を応援するというの、私たちにとって、そういうふうな地盤を整える。アンテナを張って見る。それから、我慢しながらも、ずっと後ろで必要な学生たちの求めに応じるだけの準備をしてるということなのだなというふうに感じています。その学生の求めに応じるために、一つ、外部機関との連携というの、大人の役割としてやっています。それが、たくさんの企業さんとの連携です。もともとこの学校自体が奨学金制度を取っていますので、たくさんの企業さんから協力を得て、できてきた学校でした。上のほうは奨学金を出してくださった企業さん。その下のほうは、4段目辺りからのところは、リソースをサポートして下さっている企業さん。Allbirdsの靴をくださったりとか、それから、コクヨさんがデザインを手伝ってくださったり

とか。それから、Notionを使わせていただいたりとか、そんなふうなリソースをサポートしてくださってる企業さんもたくさんいらっしゃいます。

まず、一番大きいのは、奨学金制度です。これは、この学校をつくらうって発起人になった、Sansanの社長。今、学校法人神山学園の理事長ですけど、絶対に学費を無償化したいと。行ける子が行く学校じゃ駄目だと。誰でも行ける学校でないとこの学校をつくる意味がないというふうなことをずっと言っていた。でも、ただ無償化することで、毎年お金を集めるでは、それは学校として成り立たない。だから、何か奨学金制度を恒久的に回す制度というのを考えるということで、色々な方と相談して。弁護士の方とかも入って、いろんな海外の学校の事例とかも集めて、それで11社の協力で基金を組成して、学費を実質無償化していくということを今、実際にやっています。ですから、全員の学生が、学費は5年間無償です。私立の学校って、お金がかかるのだから。私も公務員として働いてたので、やっぱりすごいなと。この私立に行ってみて、初めて実感しました。普通に学生が学費として払うとしたら、200万円です。それでも足りないぐらいのお金がかかる。でも、それ、学生1人に200万円、5年間払える家庭って、そんなに多くないと思うのです。それを、来れる人だけじゃなくて、誰でも来れる学校にするために、まずは企業と話をして、11社から110億円を集めて。その運用益で奨学金を出しています。

もう一つが、これは奨学金企業です。今、11社あって、一応、11社それぞれに4人ずつ学生が…。何々奨学生という名前になるということになっています。ロート奨学生とか、リコー奨学生みたいな感じで。そして、それぞれの企業さんからは、奨学生の担当者が付いてくださっています。初め、去年1年目は、担当者って何をするのだろうと。お互いに何をするのだという感じもあったんですが。企業さんが、今、この年の学生さんにこれを教えといてあげたい。企業のこんなことを教えてあげたいということ、いろいろ案を出してくださって。こちらからも企業理解とか、社会の構造の理解とか、そんなことを教えてほしいというふうな話をしていく中で、今はすごくいいかたちで、企業さんの強みとか、それから目指すものとかというものを教えていただきながら、自分たちがいつか起業する時にはこんなふうな会社をつくりたいとか、こんなことをやりたいというようなヒントになっていっています。私はリコー奨学生を今、関わって一緒にさせてもらってるのですが。リコーさんは、ものづくりの社員さんが付いてくださって、ものをつくってみようって。リコーはものづくりの会社。だから、ものをつくってみようというふうな、リコーの精神も交えながら教えてくれて。今、1年生が卓上のクリーナー

を一生懸命つくってるのです。電気基板を組んで、筐体をつくって、3Dプリンターを動かして。こんなに重たいデータ、3Dプリンターは動かないよというふうなのが、昨日もメールで返ってきてたのですが。そうやって、外に教えてくれる人がいる状況というのをつくるのは、スタッフなのだろうなって思っています。ただ、やっぱり子どもなので、せつかく時間を割いて企業さんからメールしてくれたのに、返事しないとか。「これをやるときなさいよ」って言われたのに、「テストがあったのでできませんでした」とか、そんな学生もいたりとかして、それはおかしいなと。そんなことをまた色々やりとりをして話しながら、この中でも学びのサイクルができていくというふうなことができてます。また、今年は、その奨学生同士で先輩、後輩ができてきたので、うちの企業はこういう企業だよって、まるで自分が社員であるかのように、奨学生が言ってるのです。私たちはMIXIだからとか、自分の奨学金を出してくださってる企業さんを…。一応、かたち上なんです。その奨学金を出すよって、企業さんが選んでるわけでもないし、別にその奨学金を出してくださっている企業さんとそれ以降、何か特別なお付き合いをするわけでもなく。ただ、4人ずつを振り分けただけなのです。でも、いつの間にかその愛着が生まれて「リコーはすごい会社なんだよ。複合機をつくってるのに、コピー機をつくってるのに、ペーパーレスを目指してる…」とか、すごく奨学生が言ってるのですが。そんなふうな、日本にある会社というのを学生がほんとに理解していく、そんな機会になっています。

そしてSP活動。先ほども申し上げたように、学習がこの中でもサイクルが回っていく。そんな機会を提供いただいたり、こちらからも一緒につくりだそうというふうなことで。仕掛けとして、スタッフがすることは色々あるんだろうなと思うのですが、これをしなさいとか、これは駄目ですということはしないでおこうというのが、私たちのスタンスです。

私たちの学校は本当にできたばかりで、多分このあとにはほんとには出ることかと思ってたのですが「β Mentality」という、もう一つの合言葉があります。それはビジョンとして掲げているのですが…。商品開発とかの中では、β版というふうな言葉がよく使われるのですが。本当にα、βのβです。「β版をつくりましょう」というふうなことを、プロトタイプをつくる時によく言われるのですが。β版でいいんだ、まずβ版をつくらうという感じで、β Mentalityというのを一つの合言葉にしています。何回も挑戦してつくってみて、その中から必要なものを検証して、もう一度サイクルを回していくというふうな、それが私たちの考え方です。私が教員になった時には、学校の現場の先生からも、それから大学の先生からも、「学校は実験の場じゃな

いです」ということを強く言われたことを覚えています。「学生で実験したら駄目だ。試すことはできない。だって、その学生にとったら大切な1年だから、もしかしたら駄目かもというようなものを生徒で試しちゃ駄目なんだよ。ちゃんと考え抜いて、本当に自分の中でサイクルを回して、大丈夫だというものを生徒に提供できるようにならないといけないよ」ということを強く言われたことをすごく覚えてます。失敗したら駄目だ、試したら駄目。その学生にとっての大切な1年というのを、自分にとっての何十年かの教員生活の中のたったの1年みたいな考えでいては駄目だってことを強く言われました。ここに来て、そのβ Mentalityという言葉聞いた時に、「あ、それでいいのか」って、ちょっと初めは葛藤があったのですが、そうなんだと。こちらが提供するものとしては、β版では多分、駄目なのだと。学生にβ版を、分かんない、意味あるかどうか分かんないけど、やってみる？じゃ駄目かもしれないけど、学生が自分たちで勝ち取っていく過程の中では、β版を次々積み重ねていくということに意義があるんだということ、すごく感じました。だから、ほんとにスタンスが違う。完成したものを渡すのではなくて、今、つくってるものを後ろから応援していく。そういうふうなのがこの学校なのだということ、ひしひしと感じました。実は、本当は公立の学校からの転職だったので、私は初めの1年は慣れないことばかりで。今日もPowerPointのスライド資料というのを持ってきてなかったのですが、それを私、1年以上いるからそれが身に付いてしまってるんですけど。紙文化というのが全然ない。今、神山まるごと高専は1枚も紙がないのです。ほんとに紙を全然使わない。だから、たまに資料とかで渡そうとしたら、受け取られない。え？何で？みたいな。私にこれを、紙を渡してくれてる？でも、いらぬですみたいな感じで、データで送ってくださいというのが、もう本当に当たり前になってるんですけど。初めの1年は、本当に慣れなかったです。そういうことも含めて、自分は何をやってるんだろう。これってほんとにどうなるのだろうというようなことが、学校づくりでも、入試でも、沢山あったのですが。ある時に、はって思ったのです。私は今までの学校をつくってるんじゃない。今までの学校を焼き直してるんじゃない。私はもうこれはベンチャーのOLになったと。ベンチャーに来たのだから、自分で思い直して、そこから、マインドセットを変えました。だから、今までどおりの学校じゃない。β版を積み重ねながら、学生と一緒につくっていく学校なのだということを、今も行きつ戻りつしながら。やっぱりちょっと何かしたら、今までの二十何年間かやってきたその習慣とか、考えが頭をもたげてきて「それはやばいんじゃないか。そんなの普通はやらないよ」という

ことが、心の中にすぐ出てくる。でも、心でもう一度問い直したり、スタッフと話し合ったりしながら「そうか。ここではこれでいいんだ。何で駄目なんだ？何で今までやってなかったんだ？それはここでは必要なことか？」ということ、何回も何回も問い直しながらやっています。今まで勤めてた学校では、本当にサイクルがきっちり決まっていたので、会議って本当に少なかったんです。割ともう走っていく。決まってることをどんどん走っていくということが多かったのですが。神山まるごと高専では、本当に日々、ミーティング。ずっとミーティングをしている。学生もずっとミーティングをしている。学生が「ミーティング、ミーティング」っていうのがすごくおかしいけど。でも、学生もずっとミーティングして、ひとつひとつの言葉、ひとつひとつの意味というのをちゃんと理解しながら進めようって思っています。それが起業家精神、コトを起こすということにつながっていくのだろうって。与えられたものを受け取るのではなくて、ひとつひとつ自分で検証して、開拓していくという、それが起業家精神になると考えています。環境的な仕掛けもたくさんあるけど、何より私たちが大切にしているのは、起業家になることではなくて、起業家精神を持つこととして学生に関わっています。